

面接者：お母さんは、あの…そういう情報を仕入れてきて、先にあなたに相談しないで、それを書いて送っちゃったわけ。

Dさん：一応そこで言われたんですけど、また「ああああ」みたいな適当な返事してて。で、そのうち（書類を）送られてて、みたいな感じです。

Pさん（20歳男性）も同様に親の強い勧めで入塾することになったが、入塾後の気持ちを次のように語っている。

Pさん：えーっと、自分的にはあんまり…そこまで…ん～…こっちから、あの～興味を、こっちに興味を示したってんじゃないんですけど。1回見学して、どういう仕組みになってるのか1回見学してですね。（塾長）さんが1回おいでってことで見学に来て。まあ、ん～…。それでもあんまり乗り気じゃなかったんですけど、親からの勧めというか、そういうのがあって、ん～…。三ヶ月なんだからって。結果的には今もこちらに関わってますけど、三ヶ月だからっていう感覚で入ったって感じで、それで入塾した感じですね。

面接者：じゃあ割と親御さんが熱心に勧めてくれたって感じですね。

Pさん：そうですね。当時の引きこもりのままだと何も進展無いからって感じで。

面接者：お父さんとお母さんとどっちが熱心だったとかありますか？

Pさん：お母さんですかね。

面接者：ではご自身としてはあまり乗り気でなかったということなんですが、入ってみてどうでしたか？

Pさん：そうですね。…入ってみて…最初は話すことができなくて、人と。こっちで。こちらに居た方々と。まあ1人…ん～…なんていうか…、そうですね…、ん～…作業には出てたんですけど、仕事。えっと…ん～…最初の頃は、こちらに入塾して最初の数週間くらいはやっぱ、まあダラダラ感覚でやってたくらいですかね。仕事とか。あと人とは接することなく、こちらの部屋に1人閉じこもってた感じですかね。それで数週間くらいたって、なんとなく変わってきたって…。

残りの9名（Aさん、Gさん、Fさん、Iさん、Jさん、Kさん、Qさん、Yさん、Zさん）は自ら支援を求めて若者自立塾に至ったケースである。これらの協力者らは、何らかの自己改善の手段を求めているところ、新聞、テレビ、インターネット、親を通して自立塾を知り、入塾に至ったと語っている。

Fさんは、27歳の男性でアルバイトをしていたが。職歴のなさが負い目に感じられ、会いたくなくなり未就労の状態を続けていた。親がインターネットで探してきたことが自立塾にたどりつくきっかけにはなっているが、「自分にとってプラスになるのならば行ってみたい」と、能動的な気持ちで自立塾に入塾している。

Fさん：最初は、親がインターネットかなんかで見つけてきたんですけど。それで、就職機関がなかったので、ここに行ってみないかということになって。で、面接を受けに行っ、最終的には自分の意志でいったっていうのが最初ですね。

面接者：親御さんからお話が来たときはどういうお気持ちでしたか？

Fさん：自分にとって、プラスになるのであれば、行ってみようという気になりましたね。

面接者：（入塾に）不安はなかったですか？

Fさん：不安はなかったですね。もういっぱい、いっぱい。現状をとにかくなんとかしようよと。

さらにFさんからは、以下のような支援情報に対するアクセシビリティへの期待が述べられていた。

「今振り返って思うことは、もう少し、そういう支援があるっていうのを知る手段みたいなものがあつたほうがよかったですね。もし、存在をもう少し早く知っていたら、自分はもう少し早く行っていたと思います。」

Iさん（33歳男性）は、自分を変えたいという気持ちで、インターネットでさまざまな機関を探していくうちに、若者自立塾の存在を知った。そのころの気持ちを次のように語っている。

「就職していたんですけども、辞めてから2年ぐらいたって。就職先とか決まったんですけど、すぐ辞めてしまった形になって。それでこれじゃいけないと思って。ずっと家から離れないで生活してきたんですけど。生まれてこの方、●●（地名）から離れたことがなくて。親元から離れて生活してみようと思って。精神的に弱いところがあつたんで鍛えようよと。」

Kさん（27歳男性）は、大学中退後アルバイトに従事するが、その間も中退の挫折感から解放されずに結局ひきこもり状態に至る。その間情緒不安定になり、よく「死」について考えるようになっていたと言う。その時のせっぱ詰まった状況での自立塾へのアプローチであつたことが語られている。

「自分の場合はもうここしか出る道はないだろうっていう感じだったんで、不安とかもなく、

不安を感じているとかしてる場合じゃないだろうっていう感じだったんで、…（中略）とりあえず、ここでつぶれたら次のチャンスはどのくらいなのかって考えちゃうし。…背水の陣でしたね。』

若者自立塾での支援の内容と長所短所

若者自立塾のプログラム内容は、母体となる団体の活動や志向性を反映しており、塾毎にそれぞれ異なる特徴やカラーを持っていた。職業能力の訓練に加えて、人材派遣の形で入塾中の塾生を職場に送りこみ、就業体験をさせるプログラムを持っているところもあれば、さまざまな職業訓練を体験させたり、資格取得を奨励するプログラムもある。

例えば、鹿児島県にある静活館では、同時にNPO活動として若者を外に送り出し、仕事を体験させる等の業務を行っている。若者自立塾が位置する地域の基盤産業は農業であり、年間を通して若い働き手を必要としている。登録している職場と連携をとり、自立塾の塾生らは集団でこれらの職場で仕事をする、というものである。個別に就職活動をし、一人で新しい職場での仕事を始めるには、かなりの心理的負担を強いられる。しかし、塾生が集団で仕事をすることによってこのような心理的負担が軽減されるというメリットがある。

ヒアリングで聴取された面接協力者が体験した自立塾での具体的な活動は、以下のとおりである。

- 就労体験／インターンシップ（畑仕事、廃品回収、工場での作業、買い物、アルバイト、ヘルパーの仕事、接客の仕事、障害者施設の見学、ホームレス支援の炊き出し）
- 就職模擬面接
- 資格取得のための勉強、パソコン、レクチャー
- 就職セミナーへの参加、ハローワークに行く
- 身体活動（体操、プール、ドッジボール、武術・少林寺拳法など）
- その他の活動（描画）

面接協力者らが、若者自立塾での支援をどのように受けとめていたのか、支援を受けてよかったこと、よくなかったことを中心に聞き取りを行った。若者自立塾の支援のなかで肯定的にとらえられていた内容としては、「昼夜逆転の生活の規則性が改善されたこと（Cさん、Eさん、Jさん、Kさん、Nさん）」、「同じような境遇にある人たちと気持ちを共有できたこと（Bさん、Fさん、Hさん、Kさん、Lさん、Qさん）」、「現状を変えようという気持ちになったこと（Gさん、Iさん、Mさん、Zさん）」、「資格がとれたこと（Sさん、Tさん、ABさん）」、「対人関係がとれるようになったこと（Aさん、Nさん、Oさん、Pさん、Zさん）」

ん)」などが挙げられた。

興味深いことに、就労体験によって体力に自信がつき、「自分にも仕事ができることを実感した」と語っている者が多かった（典型事例として、Dさん、Yさん、ABさん）。先ほどの25歳男性のDさんも、以下のように述べている。

Dさん：畑仕事とか…廃品回収みたいなこと。多少は体力がついたかなと。

面接者：今の仕事をやる上では、体力が一番ポイントになってる。

Dさん：人間関係ですか（うん）、人間関係よくわかんないですね（苦笑。）

また、身の回りのことが自分でできるようになったことを肯定的に受けとめている者もいた。

【Mさん】

「自立塾に行って生活的自立っていうんでしょうか、自分で身の回りのことが最低限出来るようになったっていうだけでも、それはすごいですね。成長っていうほどじゃないですけど、なったと思います。身の回りのことが自分で出来るようになれば、それが仕事に生かせるっていうか、仕事でも自分から進んで仕事をやるっていう姿勢っていうか、意欲って言うかそういうのがすごく養われたと思います。」

若者自立塾での支援は概ね肯定的に捉えられているが、相対的に批判的または疑問としてとらえられていたことや改善点は、若者自立塾のカリキュラムや就業支援のありかたなどの運営体制によると思われるものが挙げられていた。

カリキュラムについて；

- ルーズすぎる点。休み時間が長い。時間通りにカリキュラムが始まらない。内容が予定と変わる。
- 全体的に「甘い」「ゆるい」点。15時に日程が終わるのがいいのか疑問。
- 日ごとの活動だけでなく、継続してできるものが欲しかった。

上記のような若者自立塾のカリキュラムについて疑問点の他、就業体験の場や期間が十分でないことを挙げる者もいた。

就業支援について；

- 支援の短所は仕事の橋渡しが不十分なこと。職業斡旋があればいいと思う。
- 期間が短い点。あと3ヶ月で色々就労体験できた。自立の準備期間が欲しかった。

若者自立塾の支援による影響や変化

若者自立塾の支援による影響や変化として事例間で共通するのは、自分にも何かができる
と実感できたこと、他者とコミュニケーションがとれるようになったこと、体力に自信がつ
いたということであろう。

【Cさん：25歳男性】

面接者：生活習慣は？

Cさん：仕事していない時は好きな時間に寝て、好きな時間に起きていた。今の休日は一
緒ですが、仕事がある時は自分で寝て、自分で起きるようになった。前は、昼夜
逆転だった。働いてなかった時は朝の4時5時に寝て、昼過ぎに起きていた。下手
すれば夕方4時になっていた。働いていなかったときにデフォルトになっていた。

面接者：塾に入りはじめの頃はどうか？

Cさん：特に（不都合は）なかったです。寝過ぎしたのは1回か2回。

面接者：塾生との人付き合いは？

Cさん：そんなに変わっていなかった。挨拶や雑談はするけど、深くは付き合わない。ス
タッフによれば、あまり仲良くなれないのは珍しい部類だと言われたけど。普通
は徐々に打ち解けていくけど。（若者自立塾に）入った時から出るまで、（自分は）
あまり変わらなかった。

面接者：人付き合いとか、人を意識するとかについては？

Cさん：劇的には変わっていないと思う。でも、親曰く、よくしゃべるようになったとは
言われたですけど。

面接者：一番変化したところは？

Cさん：まあ、どうでしょう。強いて言えばニートだった時は、あんまり知らない人と話
すのは面倒臭かった。そういうの（人と話すのが面倒くさい）を考えなくなった。
考えなくなったというのが気持ちの変化だった。親とか友人とかではなく、あん
まり知らない人で。話す機会がなかったのもある。

面接者：どんなことが支えに？

Cさん：ちょっとしたことでも話せる。

面接者：話せるようになってどんな影響があった？

Cさん：どうでしょうね。気が楽にはなったと思います。

【Mさん】

面接者：生活習慣は？

Mさん：仕事していない時は好きな時間に寝て、好きな時間に起きていた。今ふり返ってみると、やっぱり、塾に入る前は誰かが何とかしてくれるだろうというか、甘えた気持ちというか、楽観的っていうか、そういう気持ちが非常に、まあ依存している気持ちが非常に強かったですね。何か悪い事があれば人のせいにしてた節があります。何か気にいらなことがあると人のせいに。仕事辞めたのも上司が悪口言ったからだとか、とにかくそういう気持ちでした。ただその自立塾に行っただけからは、自分で進んで（作業を）やるようにしたりですとか、（中略）物事をプラスに考えるようにしています。仕事がすごくきついても体力がつくんだからいいじゃないかとか、そういう考え方をするように心がけています。悪いことがあっても人のせいにしないで、じっくり考えてみて、自分に非は無いかとか。もちろん相手に非があったら、これはあの人が悪いなって。客観的に自分の状況を見て、判断するようにしています。

面接者：人付き合いとかも変わったところとか？

Mさん：全然違いますね。今では人と話すのとか別に苦じゃないですし、ちょっと楽しみな部分もあります。昔は初対面の人とはあがってしまって、話せないような感じだったんですけど、今はどんな人なんだろうとか、どんな話をしてくれるんだろうとかっていう感じです。

【Lさん】

Lさん：あー、でもやっぱり前よりは人と、自分の気持ちを開いて話せるようになったかな。今までは、人にこうなんか求めてばかりというか、してほしいとかだけだったんですけど、自分から開かないと相手から返ってこないかなあってのは勉強になった。なんか相手にこう、してほしいと思ったら、自分からいかなくちやなあって。

面接者：今までは相手に要求するとか、そんな感じだったんですかね？

Lさん：あんまり、気持ちを開いて話してなかったというか、人を信じるとかそういうことが大切なんだなっていうか。

面接者：信じることで、自分の気持ちを開ける？

Lさん：そういう感じ。

面接者：なんていうか、塾の中で感じ取ったというか…？

Lさん：そうですね。

4. 現在

面接協力者らの現在の状況は、前述の表1のとおりである。大部分の者は若者自立塾のネットワークを介して就業にいたっていたが、少数ながら自らハローワーク等で職を探し、就業にいたっている者もいた（Zさん）。しかしながら、彼らの現在の就業状況は、時給600円から800円前後のアルバイト雇用に残まっている者がほとんどであり、正規従業員として雇用されている同年代の給与水準からすると、かなり低いレベルであることが確認された。

若者自立塾のアフターケア

ほとんどの面接協力者は、若者自立塾の3ヶ月の訓練期間を延長・更新していた。このことから彼らが就業後も何らかの形で若者自立塾とのつながりを持っており、若者自立塾での生活体験が現実の職業場面で有効に機能するにあたっては、若者自立塾のアフターケアの丁寧さが重要な役割を果たしていることが伺えた。

そうした様子は、Uさん（26歳男性）のエピソードからも読みとることが出来る。Uさんは3ヶ月の塾生活を終えた後に、同期生2名と一緒に塾からある職場を斡旋されたが、その職場は厳しい時間管理と不規則な就業スケジュールの中での勤務を求められるため、「いつも、失敗して叱られる」職場であったようである。そのため、Uさんも含めた3名の卒塾生は1、2ヶ月程度でその職場を離れていた。しかし、その後塾からの再度のアプローチによって自立塾で生活の立て直しを図り、現在の仕事へと続いている様子がわかる。

「（仕事を辞めた）後は、しばらく家にいてゲームに浸っていた。…（中略）…親からは小言をいわれたが、知らん振りしていた。でも、「内心まずいなあ」という感じはあった。その後、塾から連絡があって「何もしていない」と言ったら、塾に呼ばれて3ヶ月ほど手伝いを続けた。その後、現在の仕事を紹介された。現在の仕事に就くきっかけは、塾の先生から「あそこへ行け。大丈夫だから安心しろ」と言われた。…（中略）…仕事の内容を聞いて…、やっていけそうと思った。」

次のVさん（33歳男性）の場合は、就業に対してもっと切実な気持ちを抱きながら、卒塾以降の何らかのサポート提供への期待を以下のように述べている。

Vさん：働きたいと思ってる人は、思ってるんだったら、そこ（就職）まで持って行って

ほしいなと思いますね、実際働くってことはね、それは一人じゃもちろんできない、僕もここ入ってから何度か、自立塾の所長の人に電話して、今ちょっとこれこれこういうことできつんだとか、そういうことが2、3度あって、そのときにいろいろアドバイスだとかもらったんで、(仕事を)続けられてきたのもあるんですよね。そういうの(サポート)をしてもらったりして、なんとか一年、続けられたなってのかな、ってというのがあって。

面接者：仕事に就いてからもですね。

Vさん：就いてから。

面接者：(仕事について)からも、なんかこうフォローアップっていうか。

Vさん：はい。それはすごい、助かった。

面接者：3ヶ月間だけじゃなくてね、終わってからもなんか、(サポートが)あれば、ってことですか。

Vさん：そうですね。とくに、ここは自立塾と同じ団体なので、(サポートが)すごい、助かったですね。

サポートへの期待は、具体的な事柄だけではない。むしろ、以下のDさん(23歳男性)のように、就労し始めたつらい時期を若者自立塾のスタッフや塾生と時間を共有することによって情緒的な安心感を得ていることは、若者自立塾が彼らの心の拠り所としての存在価値を有していたことを示している。

面接者：でもその途中で、嫌なことあるとここに来て、荷降ろしして帰るわけですね。

Dさん：はい。

面接者：そう見ると、塾自体は、Dさんの中で存在価値はあるわけね。

Dさん：そうですね。今はもう来てないですけど、当時は。

面接者：当時はね。どれくらい来てました？終わってから。

Dさん：その頃は毎日ですね。

面接者：ああ、毎日来てたの。はあはあ。大分救われましたか？

Dさん：たぶん救われたと思います。

面接者：ああそうですか。なるほどね。なぜ毎日通ってたんですか？寄りたくなっちゃったんですか？

Dさん：いや何となく。はい。その日にあった出来事とか(話したくて)。

面接者：それはスタッフに話したくて？それとも塾生に？

Dさん：スタッフでも塾生でも、誰でも。はい。

成長可能性・将来に対する考え

現在の状況については、ほとんどの面接協力者が、就いた仕事を続けていく気構えでいると回答していた。過去の経験や若者自立塾での就労体験を通して、自分はどんな仕事なら続けていけそうか、という目鼻が利くようにもなっているのかもしれない。職場の雰囲気もおおむね肯定的で、自分たちに協力的であるにとらえていた。以下のIさん、Jさん、Kさん、Mさんのように、これからの生活設計について前向きに取り組む姿勢を表明している事例がその代表的な反応である。

【Iさん】

Iさん：一日でも早く一人前になりたいなって。辛く感じることもありますけど、ついていけるかなっていうのもありますけど。でもやるからにはやるって気持ちがないと。出来る、出来ないに関わらず、やるって気持ちがないと、と（会社）の人に言われて、なるほど、まあそうだなと。

面接者：（会社）の方は、（Mさんが）未就業状態にあったことを知っているのですか？

Iさん：知らないですね。言ってないです。聞かれれば。あえて自分から話す必要はない。今が大切だと思うので。過去のことを考えていても仕方がない。そういう意味（過去にこだわらない）では自立塾は大きかったと思います。

面接者：今後の目標は？

Iさん：今のところに長く勤められればいいなと思います。

【Jさん】

「地に足がついた仕事に。もっと収入はほしいですね。収入は、まだ親から完全に独立できていないので。親の支援がなくても生きていけるようにしたいですし。完全に一人暮らししたいですし。」

【Kさん】

「ある程度農業技術を得たら、●●（地名）に戻りたいですね。人とか自然とかすごいいいですし、住みやすいですし、そういう意味で恩返ししたいって気持ちもありますし。」

【Mさん】

「今の仕事に役立つ資格が取れば取りたいなとは思っています。あとは品質の管理を覚えて欲しいって言われているので、検査。最後の最後の検査の部分でしっかり知識を増やして、どうすれば不良品が出ないか、どうすれば早くより良いものを作れるのかを学んでくれて言われていますし、自分でもそういうのが分かればいけばいいなと思います。」

しかし、今後の時間的展望あるいは仕事への見通しについては、必ずしも明確なビジョンを描いている者は多くはない。むしろ、以下のFさん、Oさん、Cさん、Vさんのように、ともかく仕事を得て、それを続けていけるかどうかの確信が持てずに、将来のことまで考えるだけの精神的余裕がないと回答する者の方が多かった。

特に、Fさんの仕事への向かいかたの根底には「焦り」があるとする回答には、良くも悪くもそれが就労の動機づけとなっていることが伺える。しかしその反面、そのせっぱ詰まった気持ちがFさんを‘ひきこもり’状態に陥らせてしまった原因ともつながっていたと推察される。

【Cさん】

「今後のことは漠然としか考えていない。もうちょっと何かできないかな。資格を取るか。でも、実際、行動に移す段階には至っていないけど。バイト+αで、何かしらが出来るんじゃないかなって。」

【Fさん】

「とにかく今は、職歴として通じる仕事にちゃんと就くことですね。支えとか助けになったものは特にはないです。あるとすれば、焦り。何とかしないといけないっていう自分の心くらいですかね。それしかない。」

【Oさん】

「今は一日一日が、過ごしていくのが精一杯って感じです。これからどういう風にしていこうとか、自分の中ではっきりとした答えはないです。」

【Pさん】

「これからどうしていきたいっていうのはちょっと…、無いですね。当面は今のアルバイトをして。」

【Vさん】

「将来についての考えは具体的にはないですね、なんかするとか。前やったような、一人で動くような仕事があったら、やってみたいなど。」

このように、今後の自分の生活についてある程度のビジョンを持っている者とそこまで至っていない者に分けられる。その違いは、塾生活での手応えや現在就いている仕事への手応え感なども関連しているのは当然であるが、それ以外に、入塾が親などの周りからの働きかけによる消極的な入塾か、それとも自発的な入塾かという動機水準にかなり関連している様子が認められた。

全体を通じて、今回の調査協力者たちが自立塾に対して入塾時に際して積極的に動機づけられたか（自発的か否か）、また塾での生活および提供されたプログラムに対して有効であったあるいは満足したかどうか（有り・無し・不明）、さらには就業後も何らかの形で塾からの継続的なサポート、フォローアップを得られていたかどうか（有り・無し・不明）について、表3のようにまとめることが出来る。

表3 入塾体験の効果

協力者		塾へのアプローチ	塾体験の成果・満足度	継続サポート
No.1	Aさん	自発的	やや有り	不明
No.2	Bさん	非自発的	有り	不明
No.3	Cさん	非自発的	やや有り	不明
No.4	Dさん	非自発的	有り	不明
No.5	Eさん	非自発的	有り	不明
No.6	Fさん	自発的	有り	不明
No.7	Gさん	自発的	有り	有り
No.8	Hさん	非自発的	有り	不明
No.9	Iさん	自発的	有り	不明
No.10	Jさん	自発的	やや有り	有り
No.11	Kさん	自発的	有り	有り
No.12	Lさん	非自発的	有り	有り
No.13	Mさん	非自発的	有り	不明
No.14	Nさん	非自発的	やや有り	有り
No.15	Oさん	非自発的	有り	有り
No.16	Pさん	非自発的	有り	有り
No.17	Qさん	自発的	有り	有り
No.18	Rさん	非自発的	有り	有り
No.19	Sさん	非自発的	有り	有り
No.20	Tさん	非自発的	有り	有り
No.21	Uさん	非自発的	有り	有り
No.22	Vさん	非自発的	有り	有り
No.23	Wさん	非自発的	有り	不明
No.24	Xさん	自発的	有り	不明
No.25	Yさん	非自発的	有り	不明
No.26	Zさん	自発的	有り	無し
No.27	AAさん	非自発的	有り	不明
No.28	ABさん	非自発的	有り	不明

第四節 総括

今回のヒアリング調査の面接協力者は、「脱ニート」という共通項はあるものの、その内容や経過は一樣ではないため、得られた情報に関する評価および考察も「限定つき」であることを念頭に置かなければならない。

具体的には、(1) 面接協力者へのアプローチが、自立塾を経由していたため、少なくとも、卒塾後も継続したコミュニケーションが維持されていて、施設スタッフとの関係が良好である事例に偏っている可能性があること、次に(2) 現在、仕事に従事している事例であるということのため、現状を「実際以上に楽観的、希望的に評価している」という認知的バイアスが介在している可能性があること、などである。

しかしながら、このような制約がありながらも、その中から「脱ニート者」の心理的特性や、若者自立塾の支援のあり方がニートの状態を脱するにあたってどのように役立っていたのか、が浮かび上がってきたと思われる。本節では、ヒアリング調査のまとめとして、(1) 脱ニート者の心理的特徴について、(2) 脱ニート者から見た若者自立塾の支援について論じる。

1. 脱ニート者の心理的特徴

本ヒアリング調査は、臨床心理学およびキャリア開発の専門家によって行われた。ニートの状態を脱した方々の心理的な特徴をとらえる上で、面接の場面における面接者の臨床心理学の専門家としての所見および印象から検討することも重要であろう。面接を担当した者からの報告から、いくつかの共通する心理的特徴が浮かび上がってきた。

なお、こうした心理的特徴は、ニートの状態を脱した者の特徴というよりは、ニートの状態にあるときから続く特徴と捉えることが適切である。

受動性

ある面接者は、脱ニート者に共通する人格的印象として、人や活動に対する「受動性」を挙げていた。具体的には、ものごとに対しての積極性のなさ、人の意見に身を任せるという点である。そうした受動性が、行動面において「特にやることがないから」家にいたり、「何をしたいとかがないから」就職する意欲がないというような行動として表出されている、と表現している。また、対人行動についても「自分は受け身らしく、人に相談した覚えがない(Cさん)」とか、「以前は、先生とか家族とかに言われれば何でも言うことを聞くような、言われるがままだったんで。今でも言われると断れないんですけど(Mさん)」、「前は、どんなことに対してもすごい消極的で、自分からやろうとする気はまったくなかったんです(Oさ

ん)」というような陳述にも見られている。

また、ニート期間中の生活上の気持ちとして「先のことを考えないようにしている。考えないようにしていた。」と述べている。受動性が対人面、将来面で現れているとしている。

そして、「塾の生活を過ごしていくことで、知らぬ間に変化した」と述べていたCさんは、自らのニート生活が継続した要因として“きっかけがなかった”ことを挙げた上で、ニート支援のアイデアとして、「なにかしら動き出す変化のきっかけがあったら良かった。あーしろ、こーしろ言うのではなく…（中略）…仕事とか就労のためじゃなくてその前の何かがあれば。とりあえずは仕事をやっていた時のテンションに戻すのが必要」と語っていた。Cさんにとっての若者自立塾は、受動的な姿勢で（責任のないという意味で）安易なニート生活状況から脱する、とにかく行動的に動かすという介入（きっかけ）として捉えられている。

Cさんに限らず、調査協力者たちが一様に示す受動性や主体性のなさは、すでに中学・高校段階から現れ始めている。とくに、勉学に対する取り組みが一気に落ちて、授業中に寝ていたり、浪人生活が続かなかつたりといった経緯が見られる。同様に、部活も続いていない傾向がみられる。こうした意欲、あるいはコミットメントのなさに関連して、その後の大学生活やバイト経験での「つまづき」も多くの事例で語られたが、むしろ就労以前の経験の類似点が興味深く思われる。

この面接者は、若者自立塾の提供する活動がこのような脱ニート者らが抱えている受動性を打ち破るように変化を与えたのではないかと見立てている。すなわち、面接協力者がもともと持っている受動性（対人面、将来面）が、それを温存させるような家庭環境や人間関係のなかで維持・継続されることで、自己責任をとらずに済むニート生活の定着につながっている。それが、入塾によってなかば強制的な合宿生活（きっかけ）を余儀なくされ、生活面での自立（生活レベルでの自己責任の獲得）ができるようになり、仕事への積極性が生まれってきたのではないかと仮定している。

こうした自身の生活に対して受け身的である入塾生に対して、若者自立塾として就業実現に向けてどのような支援プログラムを用意、提供するかは、後述する塾とのマッチングとの問題とも関連しながら、より慎重な検討を要する問題ではないかと考えられる。若者自立塾の提供する活動によっては、塾生のニーズとの齟齬がある場合、その効果は大きく減少する可能性がある点も視野に置く必要があるだろう。

「生きていくこと」への欲求の希薄さ

ヒアリングを行った事例に共通して、全般的に「生きていく」という意味での基本的欲求が希薄であるという印象を受けた点が非常に興味深い。具体的には、自分の得た収入の使用目的を問われた際に、「特に買いたい物がない、取りあえず貯金する」と回答したり、これか

らの人生設計を問われた際も「今はさきのことを考えていない」と言うように、この年代の若者に見られるようなモノへの欲求とか、将来への希望（野望）とかが希薄な点である。

さらに、欲求の希薄さと関連するのが、年齢相応の「セクシュアリティ」のなさである。実際に彼らと対面しているの体温感覚として、男女問わず、もっとも異性について関心・興味、願望が強い年齢層であるのにもかかわらず、全般的に彼らからは「セクシュアリティ」というニュアンスが感じられなかった。それは性的な感情の抑圧といよりは、やはり希薄であるという印象であった。具体的に、異性のことを問いかけてみてもほとんどが「それどころではない」というような、発言であった。

Dさん：異性…面倒くさくて。

面接者：へー、関心ないの？

Dさん：できたらできたでいいんですけど、またすぐに飽きちゃうんで。

面接者：今までつきあったことはないの？

Dさん：ありますよ。続かないっすね（苦笑）

面接者：なんで続かなくなっちゃうんだろ、面倒くさいから？

Dさん：面倒くさいからじゃないですかね。

面接者：将来、結婚するとかそういう考えは？

Eさん：それはない。彼女ができなくて、しょうがないんで（笑い）。

面接者：女性とのお付き合いとかは？

Iさん：ないないないない。ないですね。体力の要る仕事だから疲れちゃって。入った頃は休日は寝てばかりでした。寝て1日過ぎちゃうような。

その中であって、Hさんの場合は、欲求が就業意欲と直接的に結びついているという点で、例外的な事例であるかも知れない。

「ずっと休んで働くことに繋がったのってやっぱり趣味のパソコンだと思うんですよ。パソコンのパーツって、ものすごいスパンが短いんですよ。新しいのが出てその半年後には新しいのが出て、その半年後には性能の良いのが出て、その繰り返しなんですよ。良いなーって欲しくなるんですよ。その当時新しいのはやっぱり高いんですよ。だからお金がいるんで、ああやんなきゃなって。」

逆に言えば、欲求や希望が喚起されることによって、彼らの中に生活意欲や就業への努力が押し進められるという見方が可能かも知れない。

対人関係の希薄さ

調査協力者らの臨床的印象やニートの状態に至った経緯に対する‘見立て’として、面接者らが共通して挙げていたのが、「希薄な対人関係」である。彼らの示すこうした対人関係の特徴はこれまでも指摘されてきているところであるが、前述の受動性や基本的欲求の低さということにもつながるのかも知れない。

青年期の心理社会的発達の特徴は、それまでの親との関係という垂直な関係から仲間関係という水平な関係への移行である。ところが、調査協力者の交友関係を見ると、非常に限定的で、高等学校以降にあっても小学校から中学校の頃の限られた数人とのつきあいに留まるとの報告が多くなされた（Aさん、Bさん、Dさん、Iさん、Jさん、Lさん、Mさん、Nさん、Oさん、Sさん、Tさん、Uさん、Zさん）。このことから、幼少期から自然発生的に獲得してきた交友関係から思春期以降に自覚的に獲得する（つまり、好きでも嫌いでもない関係や利害に基づいた関係、儀礼的につき合う関係をも包含した）新たな交友関係の形成、という高次で多層的な社会関係がそこには認められないことが伺える。

以上のように、すでに多くのところで語られていることでもあるが、対人関係の希薄さの背景要因として彼ら自身の人との関係作りの弱さ、ネットワークの狭さが共通して見られた。それは、未就労期以前の交友関係のみならず塾生同士の交流の乏しさにも反映されている。仮にあっても、それをお互いに継続しようとする意欲がないため、場が異なってしまうと簡単に断絶してしまっている事例が少なくない。

先にも述べたように、今回曲がりなりにも仕事を続けている人たちは、何らかの形で塾およびその周辺での道具的、情緒的サポートネットワークを維持し続けている層であり、それは一重に周りの支援に負う部分が大きいように思われた。

2. 脱ニート者から見た支援

若者自立塾と被支援者のマッチング

今回の面接調査において自立塾によってその経営方針、意図などは様々であることが改めて確認された。こうした経営方針の違いが、そこに所属した塾生の自立能力の形成とどの程度関連しているのか、さらにはどのような共通構造を有しているのかについては、現時点では判断できない。すなわち、今回の調査協力者の多様な印象が彼ら自身の個別性による部分が多いのか、それとも塾の特徴が反映されているのかは判断しがたい。

さらには、調査協力者へのアクセス・プロセスから見ても、彼らの大部分は自身が所属し